

# サイチンガ研究

——内モンゴル現代文学の礎を築いた詩人・教育者・翻訳家

都馬バイカル

## まえがき

私がサイチンガについて研究を始めたのは、一九八七年のことである。当時、内モンゴル師範大学大学院で、日本占領時代の徳王政権下でのモンゴル民族の教育について研究を進めていた。しかし内モンゴル自治区にあるすべての図書館を見渡しても、私が研究するテーマに参考となりそうな資料としては、『蒙疆年鑑』と数篇の回想録程度しか所蔵されていなかった。そのため、大学院での三年間は、百名以上の存命していた当事者に聞き取り調査を行うことで、修士論文をまとめるしかなかった。

修論では、教育制度、教育目的が異なる各種の学校、教育内容と教科書、特別教育としての日本留学教育などの実態を明らかにした。さらに中国では「奴隸化教育」、「植民地教育」として完全に否定されていた日本占領地におけるモンゴル民族への教育は、モンゴル民族の教育史上で、ある意味で特別な発展時期であったこと。「植民地教育」とはいえ、それはモンゴル民族にとっては啓蒙教育であり、近代教育でもあった。またその教育により、内モンゴルでは数多くの近代的文化人があらわれ、その代表的な人物の一人がサイチ

ンガであったことも論述した。

来日以降、私の主な研究領域はモンゴル宗教史と日本占領時代の徳王政権下における教育史の二つであった。特に後者では教育に関する資料の収集と人物の研究に重点を置いてきた。なかでもサイチンガについては継続的にその研究を進めてきた。

研究の一環として、日本では初めてのことだが、サイチンガに関する講演会、記念座談会を企画し、開催した。なお、一九九六年から三回にわたって『東洋大学大学院紀要』に「サイチンガの人と作品」を発表したことで、日本でもサイチンガに関心を持つ研究者が現れ始めた。

また二〇一〇年、桜美林大学北東アジア研究所が刊行した『満蒙の新しい地平線―衛藤瀋吉追悼号』には「サイチンガの人と作品―日本統治時代を中心として」を掲載した。

こうした研究活動の成果として、二〇一三年にはモンゴル国から『モンゴルのためにとめた詩人―サイチンガ伝』(単著)を、二〇一四年には中国内モンゴル自治区から『サイチンガの作品』(監修・解説)を出版した。

二〇一四年には中国人民大学西域歴史文化研究所の協力により、サイチンガ生誕一〇〇周年記念国際シンポジウムを企画し、開催した。

以上が本書の内容に関わる私のこれまでの研究活動である。

本書は三部から構成されている。

第Ⅰ部の「サイチンガの人と作品」は、東洋大学大学院紀要に掲載された同名の論文を大幅に加筆、修正したものである。特に近年、中国とモンゴル国及び日本で発見されたサイチンガに関する資料と研究成果を活用しながら、サイチンガの生涯と作品をより包括的、客観的に論述することに努めた。

第Ⅱ部の「文学テキストのオリジナリティ喪失と変容―サイチンガの『沙原・我が故郷』について」は、二〇一四年中国人民大学で開催された「サイチンガ生誕一〇〇周年記念国際シンポジウム」で口頭発表したものに手を加えたものである。

一九四一年、日本占領時代に出版されたサイチンガの代表的な作品『沙原・我が故郷』を、一九八七年版テキストと一九九九年版テキストとを比較しながら、一九九九年版テキストに顕著に見られる原本からの削除・加筆・改竄した意味とその背景について分析した。

第Ⅲ部の「サイチンガと東洋大学」は、中国人民大学西域歴史語言研究所の『西域歴史語言研究集刊』（二〇一八年）に掲載した論文を基としている。サイチンガの東洋大学での

勉学について、かなり誤解があったことを指摘した。私は東洋大学に保管されていたサイチンガの成績表を参考にしながら、サイチンガの履修した三七科目とその成績について触れ、数名の科目担当教員について紹介した。特に英語の担当教員三木春雄教授の影響について論述した。

サイチンガは、内モンゴルの激動の近、現代史を生きた人物である。この一人の人物の生涯は、もののみごとに内モンゴルの歴史を示していて、その意味では、サイチンガは内モンゴル近、現代史の「歴史の証人」とも言える。

一個人が歴史の荒波を乗り越えられず、時勢に流されることはたびたび起きる。サイチンガも内モンゴルの歴史の流れと重なるように、対立と矛盾、妥協に満ちているように見える。いやだからこそモンゴル人にとって彼はまさに、正しさと誤ちの両方をその身に背負いすぎた正直な文化人と言えないだろうか。

彼は中国全土にわたって吹き荒れた無慈悲な「無産階級文化大革命」(一九六六～一九七六)の混乱の中で、さまざまな非難と迫害を加えられながら、一言の自己弁明もできないまま、沈黙のなかでこの世を去った。

しかし今日、あらためて歴史を振り返ると、内モンゴルにとって二〇世紀半ばに文化的、教育的、社会的な面で際立って重要な役割を果たしたサイチンガという人物を抜きにして語ることは考えられない。その意味からも、私はサイチンガが内モンゴルの文化的、社会的な発展にとってどのような功績を残したのかを、彼の生涯と作品を通してあらためて考えてみたいと思う。

二〇一八年三月

サイチンガ研究——内モンゴル現代文学の礎を築いた詩人・教育者・翻訳家  
目次

まえがき

第Ⅰ部 サイチンガの生涯とその作品

- 1 少年時代 3
- 2 小学校時代と役人時代 10
- 3 青年学校時代 16
- 4 日本留学時代 22
- 5 徳王政権下の職員時代 66
- 6 モンゴル人民共和国へ 91
- 7 内モンゴル自治区での活動 101

第Ⅱ部 文学テクストのオリジナリティ喪失と変容

——サイチンガの『沙原・我が故郷』について

- 1 三つの『沙原・我が故郷』 143
- 2 テクストの比較 148
- 3 三つの『沙原・我が故郷』の運命 189
- 4 結語 193

第Ⅲ部 サイチンガと東洋大学

1 サイチンガの履修科目とその成績

199

2 三木春雄教授の影響

213

3 結語

217

注

219

付録

1 サイチンガ年表

242

2 サイチンガ著作目録

252

3 参考文献

254

あとがき

261

第I部

サイチンガの生涯とその作品

サイチンガ (sayicingya、賽春嘎、一九一四年二月二十三日～一九七三年五月十三日) は、内モンゴルで最も著名な作家、国民的な詩人、優れた翻訳者、内モンゴル現代文学の創始者として知られている。彼は内モンゴルの教育、新聞、出版事業と民間口承文芸の収集・整理などの分野でも重要な役割を果たした人物である。

日本支配下での彼の文学作品、その中でも特にチンギス・ハーンを讃え、モンゴル民族の復興を呼びかけた作品は全モンゴル民族の文学史上、特別な地位を占めていると言える。遊牧民の家に生まれた彼は、中国北洋軍閥と国民党の統治及び日本軍の支配という波乱と激動の時代をみずから体験し、さらに日本とモンゴル国(当時のモンゴル人民共和国)への留学経験を持っている。

彼は内モンゴルの自治、独立、そして全モンゴルの統一の為に積極的に言説を発表し、社会的に活動した。内モンゴル自治区成立後は、同自治区の文化的な建設にかけがえのない役割を果たし、多くの実績を残した。歴史的な人物の多くがそうであるように歴史の変転、時代の変化に際して、精一杯情熱とエネルギーを注いで生きた人物である。

## 1 少年時代

### (1) 時代背景

孫文の清朝打倒のスローガンの一つに「滿蒙を追い出し、中華民族を復興せよ<sup>(1)</sup>」という呼びかけがあったが、一九一一年に起きた辛亥革命は滿州人支配の清王朝をようやく打倒することに成功した。この歴史的な政治的変動に応じて、外モンゴルの宗教主君エブツンダンバ・ホトクトが外モンゴルの独立を宣言した。これをロシア領にあったブリヤート・モンゴルと、内モンゴルの諸地域が積極的に支援した。

独立を宣言したばかりの外モンゴルは、一九一二年の冬、内モンゴルとの統一をめざして、軍隊を派遣して、内モンゴルのウランチャブ、チャハル、シリンゴル、ジョーオダなどの地域に入った。しかし翌年、バトハラーゲ（百靈廟）、ドロソノール（多倫）、林西で中華民国軍と激しい戦闘を展開し、撤兵を余儀なくされた。

その頃、大アジア主義を謳う日本の川島浪速が北京に入り、内モンゴルの近代化の先駆者の一人であるグンサンノルブと密約書<sup>(3)</sup>を交わした。分散されていた内モンゴルの諸部を

統一するための機関を設立するというものだった。この密約に従って、日本側は武器を提供し、モンゴル人による軍隊を組織して、「満蒙独立」運動を支援した。

一九一二年になると、中国を事実上支配し始めていたのは北洋軍閥で、新しく生まれた中華民国は軍閥間の争いが絶えず、統一国家とは名ばかりの混乱状態に陥っていた。それにも関わらず、いずれの軍閥が政権を牛耳っても、内モンゴルの独立、統一、自治についてはまったく認めようとはしなかった。しかも外モンゴルの独立さえ承認しようとはしなかった。サイチンガの故郷では、外モンゴルと統一するための中華民国軍との戦いは長く続いた。その戦闘のなかで、リーダーだったムートンガ（一八八二〜一九一八）が中国軍に捕えられ、一族の老若男女一六人が惨殺されるといふ事件が起きた。しかしモンゴル草原ではそれでもなお民族の独立を求める戦いは止むことなく続いていた。

当時、内モンゴルでは独立、統一、自治など、さまざまな主張に基づいたそれぞれの動きが発生していた。この動きは一九一二年のフルンポイルの独立を始め、東モンゴルの独立、チャハルの独立、そして徳王による百靈廟モンゴル高度自治運動まで、一連の自治要求と建国運動は、一九四七年の内モンゴル自治政府成立まで続くことになるのである。

サイチンガはこのような激動の時代に生まれ、青少年時代を送ったことになる。

## (2) 一生の信条

サイチンガは一九一四年二月二十三日、モンゴル大ハーンの直系部族の末裔であるチャル・ナイマン・ホシヨ（察哈爾八旗）のグルフフ・ホシヨ（正藍旗）第一ソム（佐<sup>4</sup>）の遊牧民であるキヤト部ボルジギン氏のナスンデルゲルの次男として生まれた。<sup>5</sup> 父親は勤勉で、常に役人の補助役や軍役に就かされ、競馬の調教師でもあった。彼はモンゴル文字を解し、サイチンガに「ドルジ・ゾドブ」と「ツアガン・シヒリタイ」などの仏教物語を読み聞かせていた。サイチンガの最初のモンゴル語の先生は間違いなく父親だったと言えるだろう。母親のドンジマは民謡や物語が得意であった。祖父のシャガダルは、「*qoyulai-yin šavdar*」（喉シャガダル）と称されるほど歌が上手だったという。大叔父は人徳が高いラマ医師であり、競馬の調教師でもあった。サイチンガは、大叔父からもモンゴル文字や仏教について教えられた。二番目の叔父ウレゲンは胡弓、横笛、琴などの楽器に優れ、祝日や結婚式などの行事での賛辞や祝福辞の語り手であり、地元モンゴル相撲大会でよく優勝する力士でもあった。

当時のモンゴル一般家庭よりサイチンガの家庭は、比較的開放的であり、伝統文化の雰囲気は漂う家庭でもあった。特に母のドンジマの民謡と物語は、少年時代のサイチンガに

多大な影響を与えた。幼い頃から受けた伝統文芸、とりわけ口承文学の影響がサイチンガの以後の文学創作の源泉となった可能性が大きい。彼は後年、詩人としてその名が知られるようになった後も、伝統文芸から学ぶ、即ち遊牧民から学ぶことを大切にしていた。サイチンガは、「父の語る物語と母の歌」は、人を「文学に導く最初の先生である。幼い頃に受けた影響は消えずに残る」と一九五九年にある文学青年に語ったことがある。

サイチンガは六人兄弟の次男であった。当時のモンゴル社会の習慣によって、この家の長男と三男、五男はそれぞれ七才頃に出家してラマ寺院に入り、ラマ僧になっている。

サイチンガは両親から「常に勤勉に働けば生活ができる」と教えられ、幼い頃から母親の仕事を手伝っていた。弟と妹の子守をしたり、燃料となるアラガル（牧草を食べた牛の乾いた糞）と柳の枝を拾ったり、家畜の面倒を見たりしていた。秋になると、兄弟や友人と一緒に近くの沙原に行つて葎の花を摘み、それを漬物にしていた。

彼は両親から「嘘をついてはいけない。他人の物を盗んではいけない。他人の為に善行を積み、自分自身を大切にしなさい」という仏教的な家庭教育を受けて育つた。これは後にサイチンガの生涯の信条となった。サイチンガは日常生活でも、常にその信条を実践することに努め、文化大革命での「見たことも、聞いたこともなかった様々な残酷な拷問」

を受けた非常時においても、彼はその信条を貫いた。

サイチンガは十二歳の時、家族から離れ、所属ソムのザンギ（中国語の音訳は「章京」）で、地方の役所の長官）の下働きとなった。しかしそこで目にしたものは官吏たちの残酷さだった。

日中戦争終結後、モンゴル人民共和国（現モンゴル国）に留学していたサイチンガは、一九四七年五月二日に「我が学校」という詩を書いているが、その中の一節に、

アヘンの煙を

鼻いっばい吹き出し

見るたびに睨らまれ

残忍な官吏だった。

官吏先生の鞭を

背中に受けつつ

奴隷化の教えを

ふらつくまで覚えさせられた<sup>(10)</sup>

とある。

サイチンガがザンギの下働きとなつたのは、父親と叔父から少し習つたモンゴル語を、更に学習し、自分のものにしたかつたからであつた。官吏に殴られるという体験が、外の社会に初めて飛び出したサイチンガに苦い認識をもたらすことになつた。「私は自分の家で、両親と一緒にずっと働いたらどんなに素晴らしいだろう」と、家族への恋しさを募らせる一方で、抑圧されず、自由に働ける環境への憧れを強く持つようにもなつた。

体罰を加えることにためらいのない官吏先生のところでの学習体験こそ、サイチンガが最初に入った「学問の場」であつた。このモンゴルでの伝統的な教育方法の体験は、後に西スニト旗で行つた教育改革で、真つ先に体罰廃止の実現に向けて行動させていくことになるのである。

### (3) 沙原の故郷

サイチンガの故郷はチャハル草原の沙漠地帯にあつた。この地域には沙丘、沙原、川、

## 都馬 バイカル (とば・ばいかる)

1963年、中国内モンゴル自治区シリングル盟正藍旗生まれ。1990年、内モンゴル師範大学大学院修了。モンゴル史専攻。1991年、来日。2000年、東洋大学大学院博士後期課程修了。インド哲学・仏教学専攻。文学博士。2001年、新潟産業大学、2008年から桜美林大学准教授。日本モンゴル学会理事、教育史学会会員。主な論著：『内モンゴル歴史概要』（共訳）、『サイチンガ作品集』、『モンゴルのためにつとめた詩人—サイチンガ』（キリル文字）、「モンゴル帝国時代の仏教とキリスト教—カラコルムの宗教弁論大会を中心として—」、「モンゴルのオールドス地域におけるキリスト教の過去と現在—ウーシン旗の「エルケウン」について」等。

## サイチンガ研究——内モンゴル現代文学の礎を築いた詩人・教育者・翻訳家

---

2018年11月20日 初版第1刷印刷

2018年11月30日 初版第1刷発行

著者 都馬バイカル

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル（〒101-0051）

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／ダーツフィールド

---

ISBN978-4-8460-1778-1 ©2018 Toba Baikaru, Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。